

こんな本もある ドストエフスキー『ステパンチコヴォ村とその住人たち』 高橋知之 訳 (光文社文庫)

Фёдор Михайлович Достоевский “СЕЛО СТЕПАНЧИКОВО И ЕГО ОБИТАТЕЛИ”

1 作者 **ドストエフスキー** (1821~1881) : 19 世紀ロシア文学を代表する世界的巨匠。父はモスクワの慈善病院の医師。1846 年の処女作『貧しき人びと』が絶賛を受けるが、'48 年、空想的社会主義に関係して逮捕され、シベリアに流刑。この時持病の癩癩が悪化した。出獄すると『死の家の記録』等で復帰。'61 年の農奴解放前後の過渡的矛盾の只中にあって、鋭い直観で時代状況の本質を捉え、『地下室の手記』を皮切りに『罪と罰』『白痴』『悪霊』『未成年』『カラマーゾフの兄弟』等、「現代の預言書」とまで呼ばれた文学を創造した。(新潮文庫の作者紹介から。)

2 **ドストエフスキー略年譜** (NHKブックス 亀山郁夫『ドストエフスキー父殺しの文学』の年表他を参考にした。)

1821 (0 歳) 帝政ロシア時代の地主の家に次男として生まれる。

1839 (18 歳) 父ミハイルが農奴によって殺される。

1845 (24 歳) 『貧しき人々』完成。

1849 (28 歳) ペトラシェフスキーの会のメンバーとともに逮捕。死刑宣告ののち恩赦で **シベリア流刑**。

1854 (33 歳) 刑期満了。シベリア守備大隊に配属。

**1858~59 (37~38 歳) 『ステパンチコヴォ村とその住人たち』執筆**

1859 (38 歳) ペテルブルグに帰還。

1866 (45 歳) 『罪と罰』連載開始。

1868 (47 歳) 『白痴』

1869 (48 歳) 『永遠の夫』

1871 (50 歳) 『悪霊』

1880 (59 歳) 『カラマーゾフの兄弟』

1881 (60 歳) 1 月死去。

3 **『ステパンチコヴォ村とその住人たち』**: (ややネタバレあり) ドタバタ悲喜劇。訳者・高橋知之の巻末の解説によれば、本作は「知られざる傑作」である。発表は 1859 年で、シベリア配流をようやく終えペテルブルク帰還までの間。『虐げられた人々』『死の家の記録』『罪と罰』よりも前で、当時は文壇から黙殺された。「ユーモア小説」とみなされ、当時の時事的な問題を扱う流行からは評価されなかった。が、「作家の新たな出発を告げる、野心的な作品」である。丸谷オーは本作を「楽しい気持ちで、腹をかかえて笑いたい」人は読むといい、と評価した。トイニャーノフは、主人公フオマーは作家ゴーゴリのパロディだ、とした。語り手「私」、フオマー、もう一人の主人公ロスタネフは、いずれも 1840 年代のドストエフスキーの青春時代をパロディとしている。以上は高橋知之の解説から。私自身は、単なるユーモア小説とは読めなかった。キャラクターたちは誇張され常軌を逸しており笑いの要素もあるが、善良なロスタネフに精神的隷従を強いる独善的なフオマーは、笑えない。世界史上有名なあの独裁者やカルト宗教の教祖を連想させる。現代にも見かける何かだ。笑いに見せかけ、作家は実はブラックな予言をしてしまっているのではないか。それは後の『悪霊』にもつながるテーマであるに違いない。皆さんは、どう考えるか?

**(主な登場人物)** : 語り手「私」: セルゲイ。都会から来た学生。22 歳。/ エゴール・イリイチ・ロスタネフ: ステパンチコヴォ村の地主。極めて善良な人物。陸軍大佐。「私」のおじ。/ フオマー・フォミッチ・オピースキン: ロスタネフの居候。都会から来た文士崩れ。巧みな弁舌でロスタネフ一家を支配する。/ 將軍夫人: 「私」の祖母。ロスタネフの母。フオマーに心酔。/ ミス・ペレペリーツィナ: 將軍夫人の腹心。/ オブノースキン: 没落貴族の若者。/ アンフィーサ・ペトローヴナ: オブノースキンの母親。/ ミジンチコフ: 没落貴族の若者。「私」のまたいとこ。/ タチャーナ・イワーノヴナ: 常軌を逸した行動をする女性。資産家。/ ナスターシャ: 貧しい家庭教師の女性。/ エジェヴィーシキン: ナスターシャの父親。/ バフチェエフ: 肥った紳士。地主。フオマーに対する批判者。/ コローフキン: 都会の知識人。/ ヴイドプリャーソフ: ロスタネフの従僕。/ 老ガヴィリーラ: 昔から仕えている老人。/ サーシェンカ: ロスタネフの娘。15 歳。/ イリューシャ: ロスタネフの息子。8 歳。

(ロシア文学) プーシキン、ツルゲーネフ、ゴーゴリ、ドストエフスキー、トルストイ、チェーホフ、ゴーリキー、ソルジェニーツィンら多数の作家がいる。日本でも二葉亭四迷、芥川龍之介、小林秀雄、椎名麟三、埴谷雄高、加賀乙彦、大江健三郎、平野啓一郎、金原ひとみ、などなど多くの人がロシア文学から学んでいる。